

キューバ農業レポート⑥

有機農業の認証と表示、そして実態は

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

「200万都市が有機野菜で自給できるわけ」（吉田太郎）などの情報によって、キューバ農業はほとんどが有機農業で行われているとのイメージが刷り込まれてきた。今回の調査で何人もの農家や消費者に話を聞くことはできたが、有機農業についての理解は一部にとどまっていると同時に、総じて関心は低く、有機栽培であることを表示して販売されている農産物を見かけることはなく、有機栽培によって付加価値を実現しているようには思われない。いずれにしても有機農業についての統計はなく、その実態は不明だ。

◇有機農産物の認証と表示

有機農業については国際的なルールとしてのコーデックス基準が設けられており、これを基本に各国が有機農業基準を設定している。日本における有機農業基準は、(1) 化学合成農薬（除草剤、除虫剤、殺菌剤）を使用しない (2) 化学肥料を使用しない (3) 化学合成土壌改良資材を使用しない (4) この条件を3年間維持する—こととされている。そして有機農産物であることを表示するためには第三者による認証を取得することが必要とされる。キューバでは有機農業に取り組む農家は一部存在しているようではあるが、有機表示された農産物を見かけることはなかった。

2007年に出された論文（新藤通弘「キューバにおける都市農業・有機農業の歴史的位相」）では、キューバでは有機農業に関する規定はなく、有機農産物認証機関はないとされている。しかしながら、後で見るラウル農場（次回紹介の予定）には有機認証の証明書のようなものが掲示されており、有機農業認証等についての体制・環境整備がすすんできている可能性はある。今後の調査で確認を要するところだ。

併せて紹介しておきたいのが、やはりラウル農場であるが、ここでの農業の取り組みについての宣言書が掲げられていた。そこで挙げられていたのは、(1) ローテーション、豆・トウモロコシの混作 (2) アソシエーション (3) 複合農業 (4) 土壌保全 (5) 有機肥料 (6) 有機性廃棄物の還元利用 (7) 農機具不使用と牛耕 (8) 生物的手法 (9) 害虫防除 (10) 生垣 (11) 畑の多様性 (12) 生活—である。有機農業にとどまらず、こうした持続性・循環を大事にする意識と実践は着実に芽生えてきていることを示している。

◇有機農業取り組みの実情

振り返ってみれば、キューバの農業はソ連型の大型農機具と農薬・化学肥料を使用していた大規模農業を基本としてきた。これが「経済危機」によって農薬・化学肥料の輸入がほぼ途絶したことから、農薬を使うことはできず、肥料もコンポスト等によって堆肥を作るしかなくなった。こうした中からオルガノポニコ等の無農薬・無化学肥料ながらも高収量を可能にする栽培方法が編み出され、キューバの有機農業を象徴する顔ともなってきた。とにもかくにも農薬・化学肥料が使用できない状態が一時的とはいえあったことから、無農薬・無化学肥料



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

栽培が広く行われていたことは事実だろう。これを有機農業と呼ぶためには、どれだけ意識的に無農薬・無化学肥料栽培に取り組んでいたかが問われることになるだろうが、その後、徐々に農薬・化学肥料が輸入されるようになって、多くは再びこれらを使用しているのが実態のようだ。今回、いろいろな方々にヒアリングをしたが、有機農業や有機農産物に関心を持つ農業者や消費者はほとんどいないという印象だった。

しかしながら以下のように、意識的に有機農業に取り組んでいる事例もあり、一部とはいえ、農薬・化学肥料が持つ弊害や、農産物の安全・安心について明確に意識して有機農業に取り組み、しっかりと定着させてきた農業者がいることも間違いはない。

◇ミゲル氏の農場

ハバナ市街地から車で15分ほどの都市近郊農業で、3ヘクタールほどの農場を2人で有機により栽培しているのがミゲル氏の農場だ。長年有機栽培に取り組んでおり、多数の農家に有機栽培のノウハウを指導している。ミゲル氏は独立自営農家で、ここで農家の子どもとして生まれたそうだ。「経済危機」への対応、あるいは環境問題への対応をきっかけとして有機農業に取り組むようになったものと推測される。

牛を使って耕運しており、牛のふんを積み上げたところでミズを養殖している。そのミズは畑に放して土づくりをさせ、さまざまな野菜とともに果実を栽培している。

野菜栽培には混作と自家採種を基本としており、ちょうど筆者らが訪問した時には、ラディッシュ、ブロッコリー、ホウレンソウ、ニンジン、パクチー、レタスが栽培されており、それぞれの種を混合してまいているという。果樹はタマリンド、ココナツ、マンゴー等が栽培されていた。ヤシの木もあったが、その下では豚が飼われ、また小さな池ではナマズが養殖されていた。まさにナマズも含めた有畜複合経営、多品種少量生産による循環型の農業が展開されていた。

野菜の生育はおおむね順調であったが、同じ畑地の中でも場所によって生育にばらつきがあり、種まきの時期をずらしたためというよりは、土壌条件が均一化されておらず、そのばらつきが大きいくらいに感じられた。もともとは湿地であったところを干しあげて畑地にしたものか、場所によっては大きな穴があって水たまりになっており、畑は起伏も多く必ずしも均平にはなっていない。農地面積の割には、有効活用されている部分が半分程度で、生産性は高くはないように見受けられた。

ここで生産された野菜や果実は、主に生協に出荷しているが、この生協はエンジニアをはじめとするいろいろな人たちによって作られたもので、ここに出荷している農家はミゲル氏だけだという。生協や学校給食に出しているとともに、一般にも販売しているそうだ。ここでは国が決めた販売価格が適用されているという。



ミゲル農場で飼われる牛と鶏



いくつもの野菜が混作されている



収穫したニンジンやラディッシュ等